第４回信濃川自由大学

「水系一貫～これからの千曲川・信濃川の治水～」

ゲスト：石田正人氏（飯山市長）
　　小林　清氏（燕市長）
　　久住時男氏（見附市長）
ホスト：豊口　協氏（長岡造形大学理事長）

日　時：平成19年10月11日（木）13：30～15：30
会　場：万代シルバーホテル・万代の間（新潟市）
　　長野市生涯学習センターTOiGO（長野市）

（司　会）

お待たせいたしました。これより、平成 19 年度「信濃川自由大学」第４回公開講座「水系一貫～これからの千曲川・信濃川の治水～」を開会いたします。

「信濃川自由大学」は、信濃川の自然や歴史などその魅力を広く地域の皆様とともに知り、学んでいく場として、平成 17 年度から開催しております。本日は、長野県のサテライト会場を映像中継で結び、長野県の皆さんと一緒に千曲川・信濃川の治水について議論を深めてまいりたいと思います。

申し遅れましたが、私、本日の司会を務めさせていただきます島田順子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、「信濃川自由大学」第４回講座を進めてまいります。まず、基調トーク「千曲川・信濃川上空から視察して」を、長岡造形大学理事長・豊口協様がお話しになります。では、よろしくお願いいたします。豊口理事長のプロフィールは、皆様のお手元の資料をご覧いただきますよう、ご案内させていただきます。では、よろしくお願いいたします。

（豊　口）

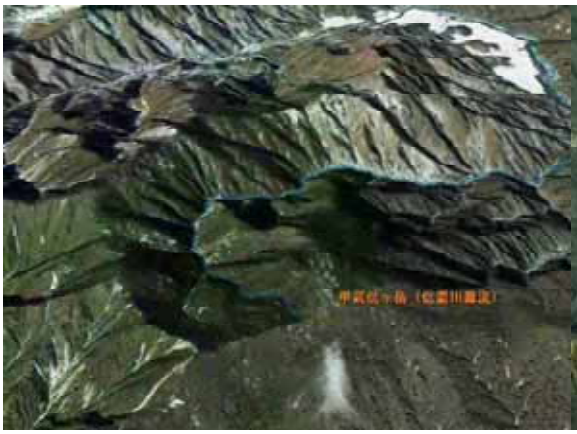
それでは、ご一緒に 367 キロの信濃川・千曲川を上空から下っていきたいと思います。300 キロ以上を 15 分で下ってこなければいけないので大変ですが、よろしくお願いいたします。私、２度ほど空からこの川を見てまいりました。見るたびにおそろしくなりました。大変な地形の中を大河が流れておりまして、その川が日本列島の歴史を作ってきているということがよく分かります。しかも、その地形が常識的な地形ではなくて、2000 万年前のフォッサマグナから始まって、今まで 2000 万年間脈々とその流れが、この信濃川ないしは千曲川流域の大地を造ってきたということです。新潟県は、この信濃川とともに生まれたのだということがよく分かります。その中に私たちの先人達の歴史が脈々と流れております。大河ドラマ等にもよく出てまいりますけれど、この大地の上で人間同士の様々な関係が描かれてきたということです。今日、歴史を思い出しながら、そして、この素

晴らしい日本一の大河を見ながら、これからの千曲川・信濃川の治水はどうするのかということについて一緒に考えてまいりたいと思っております。よろしくお願いします。

（図－１）信濃川流域図

最初に、甲武信岳からのスタートになります。この映像は、衛星から撮った写真をつないだ画像になっております。ですから、時々ずれることがありますけれども、素晴らしい画像ができあがっておりますので、ご覧いただきたいと思います。

これは甲武信岳の頂上で、そこから千曲川の源流が流れ出しております。昨年、私は源流の水を飲んでまいりました。この川の恵みを受けている人は、一生に一度は源流へ行って必ずそこで水を飲む、これは人間として使命だろうという気がいたします。絶対に他では飲めない素晴らしい水が湧き出しております。　甲武信岳（こぶしだけ）は標高 2,475 メートルです。山梨県、埼玉県、長野県の３県にわたっていて、ちょうど真ん中の地点です。


（図－２）甲武信岳上空

（図－３）川上村上空

少し離れたところからですが、上空からずっと下ってまいりますと川上村。レタス栽培で有名なところです。この中をずっと流れてまいります。この辺の土地は非常に肥沃です。

佐久盆地、上田盆地と流れますが、この辺はところどころに山が見えております。これは昔からある固い山で、その間を川が流れてまいります。

（図－４）上田市周辺

長野市内で、支川の犀川（さいがわ）と合流します。

そして、こうした狭いところから広いところに、大地に川が広がってまいります。戦国時代の武田信玄と上杉謙信による川中島の戦いも、この広いところで行われたわけです。非常にロマンあふれるところでもあります。ここは犀川の扇状地として、大地を形成してまいりました。ここで一緒になりまして、更に流れていきます。

（図－５）犀川合流点

飯山盆地の上流と下流には、川幅が非常に狭い地帯、立ヶ花狭窄部（きょうさくぶ）と戸狩狭窄部といいますけれども、川幅の狭いところがあります。ここで流れ難くなりそこで水害の危険が出てくることになります。

（図－６）戸狩狭窄部

こうした飯山盆地の周辺地域は、周囲を高い山々に囲まれていますが、千曲川はこれを少しずつ削りながら、今の流れをつくりました。

普通、山が先に有り、その後で川が出来ると考えがちですが、ここでは川が先ず有り、その後で土地が隆起し、隆起部分を川が削り、また土地が隆起し、それをまた川が削るということを、繰り返してきた所です。

飯山盆地の周辺には様々な山がたくさんありますが、この山が隆起するよりも前に千曲川ができており、隆起した山を削って千曲川が流れるという、非常にめずらしい現象で川が流れております。

この狭窄部というのは、洪水の場合に非常に大きな問題を私たちに投げかけております。

（図－１）信濃川流域図

飯山盆地のこの辺はまだ川幅が広いのですが、やがて急に長野と新潟の県境の狭いところが出てまいります。この辺は長野県と新潟県が管理してる区間です。このような国が管理していないところが、この信濃川・千曲川の流域には松本盆地と長野盆地の間の犀川にもあります。これを全部通して国が管轄するのが一番望ましいのではないかという声が出ておりますが、なかなかその調整ができていないというのが現状です。

県境から十日町にかけては川の流れが掘ってできた「河岸段丘（かがんだんきゅう）」が姿をみせます。川岸の両岸に見事な段丘ができており、段丘の上の方に住んでいる方々はあまり問題がないのですが、下の方に住んでいる人たちには、洪水の時に非常に危険な状態が訪れることになります。

途中に東京電力西大滝ダム、ＪＲ東日本宮中えん堤があります。このダムによって取水されて、水の流れが少なくなるという問題も起きております。こういった状態で山の中を川が流れてまいります。

（図－７）河岸段丘（十日町市）

川幅が広くなったり、狭くなったりということを繰り返しながら扇状地、それから洪水の時に水が溢れる地帯等も出てまいります。映像は、魚野川との合流点までやってまいりました。やがて支線の魚野川の水量を含めて、川は本格的な信濃川として下流に流れていくことになります。

「山本山」が見えていますが、この山本山は今でも隆起しておりまして、それに川がぶつかって蛇行するという、非常に象徴的な地形を表現しています。

（図－８）魚野川合流点

本流を下ってきまして、長岡市を通ってやがて「大河津分水（おおこうづぶんすい）」へとつながっていくわけであります。

これが大河津分水で、日本海への分水路の流れと新潟市に向かう流れに分けられます。ここまでが連続した信濃川の流れということになります。ここから下流の方が次の信濃川ということになります。

この大河津分水洗堰は４年前に改築されまして、今は可動堰の改築工事が始まっております。この分水を造ったことによって、大河津分水より下流の越後平野は、潟が非常に安定した状態になりました。下流の方では信濃川からの水害ないしは洪水というものが全く姿を消したということで、安定した農業政策ないしは経済・経営というものが行われるという状態になっております。これは素晴らしい事業だと思います。

（図－９）大河津分水

この洗堰を経まして信濃川が極端にここで細くなるのですけれども、ここでまた川が蛇行いたします。なぜかといいますと、この越後平野は非常に平坦なところでありまして、川が実に悠々と流れる地帯を構成しております。ここにたくさん周りからの川が流れ込んでおりまして、それが時々いたずらをすることになります。

（図－１０）信濃川の蛇行

政令市新潟の中心市街地に入る手前に、関屋分水路が造られております。この関屋分水路ができたことによって新潟市がさらに安心といいますか、安定した状態で生活できるという形になりました。平成 16 年 7 月の新潟・福島豪雨水害の時に、もしこの関屋分水がなければ、おそらく新潟市内のほとんどは水に覆われ、２兆円を超すような大きな災害を起こしたのではないかと語られております。素晴らしい治水工事の成果だと、私たちは考えたいと思います。

（図－１１）関屋分水路

現在映像で、私たちは「やすらぎ堤」という素晴らしい堤防を見ながら、日本海へ信濃川が流れていく状態を見ております。

これが甲武信岳から新潟港で日本海に注ぐまでの信濃川の実際の姿でありまして、こういう映像が撮れるということは誠に素晴らしいことだと思いまして、ご紹介いたしました。どうもありがとうございました。（当日は動画により紹介）

（図－１２）新潟市内

（司　会）

ありがとうございました。豊口様のナビゲートで、千曲川・信濃川を空から旅していただきました。以上で、基調トークは終了でございます。

※図-2 から図-12 は地球観測衛星イコノス(日本スペースイメージング(株)撮影写真

：撮影時期 2000 年～ 2005 年